正卜考

三

特1
404

国立国会図書館　タイトル『正卜考 3巻』 請求記号 特1-404

ガラス使用

安齋隨筆曰 雞ト鼠ト 史記封禪書曰亦祠ニ天神上帝百鬼ニ而以ス雞ト一 註曰漢書音義曰
持ル雞ヲ用ユトヲ如ニ鼠ト一正義曰雞ト一法用ニ雞一狗ヲ一生ヲ祝レ願ヲ訖ヲ即チ殺ス雞狗ヲ一
煮熟又祭獨取ル雞ヲ兩眼ノ骨ヲ上自左ニ孔裂ニ似ル人物ノ形ニ則吉ニ名レ足則凶今
嶺南ニ猶行ヒ此法ヲ也

寵輪占 亦占 古語拾遺曰於是ニ天地主神令ス二中臣ノ巫ニ占ノ中求其ノ由ヲ上
○志止止利モ占ノ名欲イ志止止鳥ト在リ

正ト考三巻

後附

雑占

此くさ〳〵ぢ占事を。正ト考をかゝらたして
こむとする因ふ。古書どもの中に見あたる
かぎりをぢ〳〵ふの方集めて。れろ〳〵考へる説
ぢ所ある歟。かゝそへ考るなり。但しそのくさ〳〵
さの中ふは。世ふ所まねくものせるふをぢらで。
大神宮の神事に乃こ方おゝえ。まゝ一社ぢ神事に

伴信友 稿

白井氏藏書

国立国会図書館 タイトル『正ト考 3巻』 請求記号 特1-404
ガラス使用

あだりて行ふ例ときこゆるもの。まこと女ども
はのをちなれすさびわざ彼おと。為彼らひ者り
けむとれもちるゝをもあれど。すてゞしてあるせ
り。されど。もと外國ぶりにもとづかうとおこ
ゆるはとらぐ。

○琴占　延暦大神宮儀式帳。六月例祭中ふ。以十五日
夜乃亥時第二御門仁。御巫内人仁御琴給豆。大御事大御
命乃請豆。以十六日從宮西河原仁退出云々。九月例神嘗祭條に
も。以十五日云々。以同日夜亥時。御巫内人乎第二御門
ホ令侍豆。御琴給豆。以十六日請天照坐大神乃神教云々。職掌
云。まこと職掌雜任の下ふ。御巫内人云々。職掌三節祭十
五日夜以亥時第二御門令侍。木綿蘰御琴給豆。請大神

特1
404

乃御命云々。三節とは六月九月十二月ないふ
トふる神事乃り。さてその六月乃例祭を。同宮建久年
中行事に委しく注して云。但延暦のころとは。れ
事もありぬべきなり。其六月十五日御占神事云々。御
意して見るべきなり。後ざまに革りぬる
巫内人衣冠自外幣殿鵜尾御琴請件御門外東方候御殿
向先詔刀申其詞云。云々等不浄事疑。於御前御占清々
令占定給恐々申。次以笏御琴搔三度。度毎有警躍。次奉
下神。其御歌。阿波利矢。按ふ何怜やを。歌ふ聲ぶりのま
樂歌。東歌。催馬樂歌遊波須度万宇佐奴。樂遊者為と不
などふ。然る例あり。神に書注せるをのなるぼし。
御琴は搔をべれど。樂遊ふはあらにと。真阿佐久良尓。
情ゴ歌む出せりとれおえて。ゆをれなり

国立国会図書館　タイトル『正ト考 3巻』 請求記号 特1-404
ガラス使用

天津神國津神。於利万志万世。奈留伊賀津千毛。於利万志万世。

ふり。のく言ふて。鮮明てアポを。もと更多世。阿佐久良仁。

の明てのら。鮮明の。ポを。清神。

ふを。考へ。朝考る。清義。

しろ。意。ゆ。此意。

てきた。意。

ば。朝。倉。橘。廣庭。宮。

た。字。のおとく物を貯置ふ。

きこゆれど。朝。

宮号のを。古事記長谷朝倉宮段阿佐久良仁。

考る事あ。ど。ふ。

阿佐久良を。沙庭。

考る事。

り。申す。以上。一首。

阿波利矢遊波須度万宇佐奴。安佐降。久良仁。

ゆ。坐。ま。せ。べ。て。神。を。請。せ。天。津。神。や。ら。沙。庭。座。

る。ふ。ま。ふ。ま。ふ。ま

いるごとく。第一の歌には天津神國津神於利万志万世といふ言を。名の下ゐ毛とい言を附へ考るも。尊卑次第のありて。彼合せらるゝはいかゝ。彼考ふべし。さてまた此占事。天照大御神の命を請奉る由彼の御名を申し奉らぬを。とよ大御前もて供奉る業なるを。ならば。おとさらふ大御名を称ものらず。歌あるは。故實のあるべし。依るふ集むるまで。唱ふ諸神を。神議の事めふ集むるまで。于時大物忌。父。正權。神主。不浄不信。疑以人別。姓名。為某神主。若有不浄。事申。御巫。内人以同詞。又申御琴搔内嘯。件嘯音鳴以清知。以不鳴不浄知也。其後御饌調備之輩。内外。物忌。父。並荒祭瀧祭。大内人。物忌。及思刀。御笥。櫃。桶。杴。御机。陶土師御器。又可供用所々。御贄等。疑占定也。丙合輩悦。不合輩成恐。嘯はウプ。ウプクとよむべし。神代紀下巻ふ隠

入海釣時。天孫宜在海邊以作風招風招即嘯也。如此則吾起瀛風邊風云々。第居濱而嘯之時迅風忽起云々。と見えたる。ふ形。字書ふ嘯吹聲也。また蹙口而出聲。といふ。類聚名義抄。その古書どもを。ウプ。ウプクとあ。ゆ。はゆる口を蹙て。鷺と云ふ鳥も。其聲に似たるを。笛のおとと出す聲。ウプ。ウプクとよむ。ふ。嘯字曾牟久。とよ。然ふ。そのウプ。ウプクを。新撰字鏡ふ。嘯はれも合をば。ふ。ふ。ふ

とも。官ハ亀トハ。吉兆の由ヲ。後世の名目と聞ゆ。其後又御巫、内人三度御琴ヲ
搔警蹕之後奉上神御歌如本。但所奉下神、御名申今度、
帰御申云々。と見えたり。神下の歌ハ於利万志万世と申たるを。おの神上の度ハ
帰御と申す由ハ。さて案ふハ。阿佐久良仁と云言を。帰御と申にて。其
意を得べけ也。別てあるハ。ばし。さておの御占ハ神事を。内宮の
とゝらでは。
神官ハ尋問たるハ。おの御占、神事。今も御占神態とて。
わづらにうとばうを行ふハ。琴、板とて。九長二尺五寸
むゝり。幅一尺餘。厚一寸餘なる檜、板を用ふ。其を笏ハ
て敲く態を為と云ふ。そは後ハ琴を板ハ代へ。笏も
て敲くゝ せ。ハるばし。さてまゝ鈴屋翁ハ説ハ。萬

葉集九巻相聞ハ見えたる。神南備神依板ハ。為杉乃。念母不
過戀之茂尓。とよめる神依板の事ハ。今の世ハも古神
社ハは。琴ハ板とて。杉の板をたゝくて。神を降し奉る
うゝを行ふ事。往々ハるハれもひ合をばしとて。おの
琴占ハ神事のおと。引出ら也たり。續後拾遺集。恋歌
りおゞ神依板ハむく杉の。く但し巳がれもふとおろ
れゆくゝらにしげき恋ゝお
た。万葉集に載たる歌ハおろ。をやくより琴ハ杉、板ハ
代へて。神依板と呼てものべくたれをは也。歌ハ
過とハ序ハ。神依板ハ為る杉と定先てよめる也お
も。ハば。古よりかあらば杉板をもて造る例とおゆ

国立国会図書館　タイトル『正ト考 3巻』 請求記号 特1-404
ガラス使用

るはされもむ合をべし。然まだ神依板は。をとより別形るト事なり。大神宮ゟ琴占に。事畧ぎて板をてものすゑは。れのゞゝら似きるゑて。古神社ゑて琴ゟ板とゝふを。大神宮ゑてゑとそだてする状。まねゞゝるものゟ形るゞゝし。その板を敲きて音よりてト考る術あるゞゝし。さてまゝ荒木田經雅神主ゟ。延暦大神宮儀式帳解ゑ。ゑの琴占ゟ事を論ゑて。儀式帳造宮使造奉物の中に御琴一隻と記し。寶殿物ゟ中ゑ鵄尾琴一面と有る状合せれをふゑ。一隻と書る御琴は。既ゑ琴板なりし故形り。然る状式ゑ和琴一面と記さゑきるは。古儀のまゝを記さゑゝる

形らむとゝゝへゑど。中臣本系帳ゑ。神琴師弟雄。神琴師豊道形ど有ゑば。重ね事なり。建久の年中行事ゟ頃までを。まさしく琴を撥きる由記るゞゝうへゑ。寛正加筆に。當時御占勤仕次第云々。中琴置。大物忌父撥之と有ゑば。寛正の頃までを。琴を撥きるを決し。儀式帳ゑ御琴一隻と書きるは。造宮使調進ゑゝる書来きる例なゑで難形し。ゝゝ冥内宮年中行事ゑ。正月十二日水量柱奉抹事。自長官食料百文給。由貴殿出納奉伐之也。檀長一丈三尺皮削切口三寸也。占木謂之。又四尺許細木一本。是謂博士木十四日夜水量立事。政所物忌父一人。御巫内人等。光吉。占木酒殿前置石北端立月影。九丈殿西軒。酒殿西軒同通指時。是夜半也。占木影指所博士木立也。件中間遠吉知。近不吉知也。歳善悪是以知也。同二月一日ゟ條ゑ云。又今日水量

国立国会図書館　タイトル『正ト考 3巻』 請求記号 特1-404
ガラス使用

羌去年晦夜破立・及卯杖所取退也・水量ノ占木ハ由貴殿ノ出所ノ給・博士

○あの事・延暦儀式帳ニは見えぬ・拾芥抄歳運部ニ懸象躰倒云とて・正月十四日十五日夜半時・以一丈竹而立之・度其月影得九尺八尺云々・得七尺云々・得五尺云云・得三尺二尺云々・とある占事ニて・漢ざまなるしどけなき事ときこゆ・さむ・あらぬ・但しあの水量・神事・いまを行ふとぞ

○神依板　あは因ふ・上孔琴占の條ニ論ず

○片巫・肱巫・附志止々鳥占・竈輪占・米占・及飯占・粥占・管占　古語拾遺云・昔在神世・大地主神・營田之日・以牛宍食田人・于時御歳神子・至於其田・嗔饗而還・以狀告父・御歳神發怒・以蝗放其田・苗葉忽枯損・似篠竹・於是大地主神令片巫・志止鳥肱巫・竈輪及米占也・占求其由・御歳神為祟・宜獻白猪白馬白雞・以解其怒・依教奉謝・御歳神答曰・實吾意也・云々・

片巫・肱巫・北

ふ・称号とは通ゆ・ど・ちく・いろなる・曲の名・ふ・ふ・片・肩・肱・ふ・對・言・ふ・足・おく・たく・おゆ・もる・ふ・ふ・ふ

ふ来いるりる室室ら形形題昭注ふせり藻塩草占條室ふり袖中抄ふ吾身ふ
あむをの形八八嶋嶋を烟は竈さり下野国條室八を嶋件の歌を件
て春年ど八嶋を烟ふの竈起戸ら野国條室八を嶋件の歌を件
い年のめ嶋を烟ふの竈起戸ら野国條室八を嶋件の歌を件
消ゆ中形る烟ふの竈起戸ら野国條室八を嶋件の歌を件
消ゆ中形る烟ふの竈起戸ら野国條室八を嶋件の歌を件
え事ふの竈起戸ら野国條室八を嶋件の歌を件
ぬのや此い処云とは国條室八を嶋件の歌を件
を吉凶も除ふは身のぬてりのと書思と條ら嶋を件
見凶も除ふは身のぬてりのと書思と條ら嶋を件
て夜を夜を夜を

神慮を問むとて三粒ばかりの竹管に十七
ふと淡ト記ふ趣ありト形る淡し然らば米占のなごりとを
命終時依世俗法問飯占時神託之比頃冊治比夫人誕生一昊王子云親々王号之大徳親王ト
八年之比頃冊治比夫人誕生一昊王子云親々王号之大徳親王ト
然經三年許在世而薨向問飯占時王大徳王
者言我是善珠法師也云々と
書は語中ふ法記せる書なり。そ
十四年の頃記せる書なり。そ
徒の浮説とと記こえて信ぐこと
の事を證ふとすば。但し件の文
命終の時を業ばおと。きこ
ばの係を語なるが故ふ。こ
占ふ事ふ見えをれど。を
方ふ由ふ見えをれとは
ふもやあり形る見さて
ても占ふいふらむ米炊きて
神名前ふて巻神社事をき行ふ由ふ
石ふ神事べ行ふ今の世諸と飯
粥を社煮ふて年毎歳の正月十五日粥の豊凶を占ふ
中の水田種陸田種の豊凶を
ふて巻神社煮ふて年中歳の水田種十五日粥の豊凶を
粥を社煮ふて年中歳の水田種十五日粥の豊凶を
ふて巻神社煮ふて年中歳の水田種十五日粥の豊凶を
ふて巻神社煮ふて年中歳の水田種十五日粥の豊凶を

ふて四五寸むろりの竹管に十七
て蕎麦を終として十七種ふ次第を定て
竹管ふ記し別ふ惣管とて徒ふ
十八本を束ねて釜中ふ入て煮さふ管
調ふて打ち管を取上てその管
きるを大吉と半ばのり入きる中
ば。粥を汁に入て米を入れて粥
ば。とを中吉とし粥も汁を入ふ管
占ふとぞおは國人中山美石ふ
合せる趣かり。まと八丈嶋人服部
事どもを誌せる八丈裁衣織ふ書義高石巻
ト部粟粥に煮る鍋に中へ竹筒と入て年に正月
ふを云ふり。と云ふり。河内國枚岡社記ふ正月
五日トウラヘ田祭当日於神供所焼小豆粥吉凶上五寸掛竹管第十を日
管中納百穀署依蒸気強弱占年穀之粥々也蓋当社管第十を日
一神事水速氏神主之外無有相兼と
国小冊生神社ふを粥占神事ふ
東郡高天神ふて粥と管ふて
を同趣とふこ。おれふ
くさどし趣とふこ。おれふ
むべきふをのらさ然ふ
かくにはあて因ふ然ふ
記ト法せるとなきあゆ
ふ記ト法せるとなきあゆ
ふ記ト法せるとなきあゆ

国立国会図書館　タイトル『正ト考 3巻』 請求記号 特1-404
ガラス使用

○夕占　萬葉集四巻

ふ。月夜尓波門尓出立夕占問足占乎曽為之行乎欲焉。夕占を。ユフケとよむべき由を。下もら意を得へし。足占は。此の下に引く歌の中ふ。ども。とりて。れのげろあり。その足占のをを。おれ下は標て云。侍しく歌の中ふ。事霊八十衢夕占問。占正謂。妹相依。事霊は。言霊。まて。十一巻ふ。依来まれといふ古語あり。委しき考ふ。神霊ふの。八十衢を。方々へ行く。多くの衢をいふ。占正を。占の正。下ずり。しく合ふをいふ。占ふまさしと言ふ。をれおれなり。亀のますらとよめるも。正トラあり。さて。おの歌を。拾遺集ふ。はなさしてふ八十のちまさ。夕占とふ。うれまさよれき妹ふあゆぼく。と改めて載られまく。十六巻の長歌ふ。ト部座。亀毛莫焼曽。云々。母之御事歌。御言歌。百不足。八十衢尓。夕占尓毛。ト尓毛曽問。云々。ト尓毛曽問のトは。亀ト形。反歌。ト部乎毛。八十乃衢毛。ト尓

○正ト考三　十

雖問。云々。亀ト夕占。三巻。石田王卒之時。丹生女王の作る長歌ふ。杖策毛。不衝毛去而。夕衢占問。石ト以而。云々。夕衢占と。石ト夫木抄ふ。行家卿。ゆふけとふ。の兩なり。さて。とれ。かさた恋とはれもひ知りまき。と見えきるは。をさらおの歌詞よりてよみをまへりとれゆるに。然ては。石占よりて。夕占を問ふおとのごとく通えて。いに。かまく。十三巻。長歌ふ。玉桙之道尓出立夕ト乎。吾問之可波。夕ケ之吾告良久。吾妹児哉。汝待君者。云々。十一巻ふ。夜占ト問。吾袖尓置白露乎。まく。不相尓。夕ト乎問常。幣尓置尓。吾衣手者。又曽可續。まく。十七巻ふ。思多恋尓。於毛比宇良夫礼。可度尓多知。由布気刀比都追。吾乎麻都等。奈須良牟妹乎。安比底早見牟。まく。十四巻東歌ふ。由布気尓毛。許余比登

乃良路。今夜と告ろなり和賀西奈波。阿是曽母許與比。何ぞも
與斯呂伎麻左奴。倚り来まさぬ形り。さてタ占タト
と。古の二の假字書を證とすぼし十一タト尓毛。占尓毛告有。今夜
谷。不来君乎。何時将待。をぐ占といふるは。そのかみ
ふ。タトとまゝ鹿トれるぼし。いげ
占と。兩うらへをる由なり。まゝ四巻大伴家持和タ占
問。足ト乎曽為之。タ占と足ト形ど見えをり。かゝ古
坂上大嬢歌ふ
ぬ形ども。兩なり
ぬ。はゝ。その趣ぬ推考ふぼし。猶考ふ
るふ。拾芥抄ふ。問タ食歌。フナドサヘ。ユフケノ神ニ。物
問へバ。道行人ヨ。ウラトサニセヨ。この歌。既く袋草紙
の歌ぬ初句。抄の印本ハ。フケトサヤとあるは。誤寫なり。
り。いま古本と。袋草紙の本ども。訂し合せをる形り。

児女子云。持黄楊櫛。女三人向三辻問之。又午歳女午日
問之。今按三度誦此歌。作堺散米。鳴櫛。齒三度後境内来
人答為内人。言語聞推吉凶と見えをるぞ。萬葉集ぬ歌
どもふ見えをる。タ衢占ぬ遺風なるぼ故いまの
抄の趣ハ。ぬきて。ぬかゝ。ぬ知り。そを古へふめぐら
して考ふるふ。まゞ歌ふ。フナドサヘと云ふるは。衢神
なり。そは古事記ふ。伊邪那伎大神黄泉國より歸坐し
て。御身滌の時ふ。於投棄御杖所成神名。衝立船戸神。と
見えを。まゝ神代紀ぬ一書ふ。同神黄泉國より歸りま
しけるとぬ。自此莫過。即投其杖。是謂岐神。岐神。此云布
那斗能加微

国立国会図書館　タイトル『正ト考 3巻』 請求記号 特1-404
ガラス使用

又一書に。投其杖曰。自此以還。雷不敢来。是謂岐神。此本名。号来名戸之祖神焉。とあり。古事記傳ふ。古の来名戸祖神の事は。後人の書加書紀を撰はるゝとき。原本は別一書の中に。来名戸之祖神と書をるゝ在けるを。紀の作をまひいまゝに。彼本舊傳をまゝ写るをの形るばし。いげまもあの名の古傳ふ合写るあと。下よりおとし。さてよゝ神代紀一書ゝ。経津主神。以岐神為郷導。とゝ写ることを見えをり。さてこの来名戸之祖神と称を御名義を。来勿戸之塞之神なり。そは自此以還雷不敢来と詔りて。御杖を投棄をまゝ写るゝ。其處は界戸として塞坐を神と成り坐る由形り。古事記ふ。衝立船戸神と称せるは。投をまゝ写る御杖の衝立て。神と

成坐る狀なまは。衝立居て。黄泉神ふ。さく戸を經て来勿。と塞りをまふ由よく。その時は狀はいさゝ前後は違ひはまど。御名の義は異ならば。黄泉戸大神と塞坐中を御名ふをれも合をべし。さて神の下は傳ふ。船の布を經て。久那斗の久は。来形り。古歌ふ。来るあと。来経礼婆。まと来経行れどあり。来と。経と。重ねてを云へまば。布那斗も。久那斗を。同意なる由。説を形をり。まと布と。久と。通はゝ云ゝ言の例あまば。此も。その例をべくや。いげまふも同義は。名なり。さてあの神の化りませる趣。古事記形るは。伊邪那伎大神の黄泉より現國ふ歸り坐て。御身滌の始りを。邪那岐より出をまへりとし。神代紀なる一書は傳はとせり。御名は義をれをへば。神代紀の事とかを。志ゆ。湯津磐村之如久塞坐皇神等之前ゆ申久。八衢比古。道饗祭祝詞ふ。大八衢

国立国会図書館　タイトル『正ト考 3巻』 請求記号 特1-404
ガラス使用

八衢比賣。久那斗。止御名者申。称辞竟奉。久根國底國
與里。麁偏疎偏来物。尓。相率。相口會事無。云々。守奉齋
奉。祀。云々。は御門祭、祝詞と併考るふ。そべての意。凶神
止。神も黄泉國より出来り。又その黄泉の穢ふ
因りて。成りたまへるなれど。然る凶神をちは。神祇令
相まドあり。相口會をなくて。守護めへとなり
道饗祭の義解ふ。謂ト部等。於京城四隅道上而祭之。言
欲令鬼魅自外来者。不敢入京師。故豫迎於路而饗遏也。
と見え。鬼魅とは。いをゆる根國底國より。荒
ぶうとび来む凶神をいふ漢文なり。よって臨時
祭式。蕃客入京の時。まって送堺時の。神祭ふ條ふ。京城四
隅為障神祭。は蕃客。都ふ参上りて。羅帰る時ふ。その
あとのあらむを恐て。京城の四隅ふて。岐神を祭りむ
て。障しめをまへるなり。さて蕃神も。黄泉神とも異ふ

りといふべけれど。素より穢れ國ふれて。おはゆと上代よも
黄泉神ふ類へて。悪むをまず。るとを理ふ。
ア。の式ふるばく。いとを理ふ。
古は蕃人どもの。みぎうふ帰化る。御政ふるばし。然許して。御民とるを。
させをまず。るふの中ふも。数ちらせをまず。
く。まって官職をさへ賜て。朝廷ふ仕奉らせをまる蕃
へるは。数知らぎれこえて。姓氏録ふ載らぬをる蕃
別の氏々すら皇別神別の三ッ。一ッばりを見えるを
は。障神祭ふ故實ふ。をく背れをる。身滌祓せ。とのおとさきこる
ゆるは。いらかるふとにいりを。をまむるりしにやれば。たばたふ形ふ。
をれむ御世ふれよりては。稀々参上る琉球。朝鮮の國ふ近きを。然
使れ。まって阿蘭陀國の商人ふ。江戸ふ踏ふ参上れるをれきて
を。蕃人どもふ。大皇國ふ土ぎふ跪せをまはぬおと。
せさをまへるは。れのいらふ故實ふ。もかなひて。いと
とめでるれ御政ふこそはあらぬ。ぼ。ぼ。ぼ

神代紀一書に来名戸之祖神と古事記に船戸神と一書に岐神とまうす。

見えたる神なり。道饗祭祝詞に大八衢に湯津磐村之如久塞坐皇神等之前に申久。道の衢おとは磐群の如くそこ塞り坐す神たちの由なり。皇神とは尊称なり。八衢比古。八衢比賣。久那斗止御名者申氏。と申したるは是なり。さてこの祝詞に八衢比古云々と申せるによりて。来名戸之祖神は。こたち男女二柱神を並せて申し御名なること知られ。また大八衢に磐村なる如く塞坐と云ふるによりて。祖神と申し義を明に知られたり。上に挙げたる万葉集三巻なる石田王卒之時丹生女王たち長歌に杖策毛不衝毛去而夕占問云々とよめるは夕占を問ふ杖策て行てをのする事なる玉の病たち危篤

しるしに心のもくもくしくて。その杖策くあとをすれとて御杖に成ませりしいたる。故實なる衢に塞りまして。凶神を追れよりの意とおえたり。然らはその杖りくも岐神のを退けて。世を守護たまふ神に坐まさり。扶桑畧記に云。天慶二年九月二日丙午注之。近日東西両京大小路衢に刻木以作冊神相対安置凡厥体像髪髯丈夫頭上加冠鬢邊垂纓以塗身成緋衫色起居不同逈各異貌或所作女形対丈夫而立之臍下腰底刻繪陰陽構几案於其前置坏器於其上兒童猥雑拜礼慇懃捧幣帛或供香華号岐神又称御霊未知何祥時人異之。と見えたるは。いと深なる祭事なりけり。故実に據たる趣なりけり。今を形かの遠鄙に道は道祖神とて辻祠に祭る形なりけり。さて其死後祀以為祖神漢語抄云道祖風俗通云共工氏子好遠遊故名抄鬼神部に道祖はまた和名抄云佐倍乃加美とまた訓へるまた岐神は日本紀私記云岐神布奈斗乃加美とあるは違へるなり。祀れるは共工氏の子の死をいふ。

国立国会図書館　タイトル『正ト考 3巻』 請求記号 特1-404
ガラス使用

ちぐ同書ふ日、造天地経ニ云、佛令宝應菩薩造七日まゝ月造天地経ニ云、佛令吉祥菩薩造七月ヲ形どゝ妄誕をさへふ載ら是ゝるは、況おえんをるゝ物識人のいかなるゝろぞやさておの占ゝ由布気とゝふは、夕ふ衢に出て、往来人ゝ言ゝ聴て、そゝ言を

とて神教とゝして、占問ふ事に合せ判断る術ゝて、そを由布気とゝもゝゆは、夕来経なり。夕ふ来経る人ゝ言ゝ

ゝ。占ふるをもて、此占の名とせるゝて、来経の約り気なり

歌ふ、道行人ヨ、ウラトサニせヨ、トウラ正しゝ為とゝ

境内来人答為内人言語聞推吉凶といゝ

を夕ふものするをは、萬葉集ふ、夜占問、吾袖尓置、白露

乎、云々久安百首ふ、大炊御門右大臣、玉鉾のゆふけと

をとはむおの暮ふ、山時鳥聞くやゝゝ

よめるふく知らるゝ

作る

櫛歯三度後

云々とあり

とゝふふ詮て

を問ふやゆふけの占ま

見せかむ、と見え、續後拾遺集に、物名、しもゝ崇徳院御

製、刺櫛もゝげの歯形くて吾妹子ゝゆふけの占ゝ問

ゝぞわゝらふ、とよ由せを

ひてゝゝげの小櫛の占ゝ

のむゝ形おれも夕占をよ

女三人向三辻問之とゝ

作る

櫛歯三度後

云々とあり

とゝふふ詮て

を問ふやゆふけの占ま

見せかむ、と見え、續後拾遺集に、物名、しもゝ崇徳院御

製、刺櫛もゝげの歯形くて吾妹子ゝゆふけの占ゝ問

ゝぞわゝらふ、とよ由せを

ひてゝゝげの小櫛の占ゝ

のむゝ形おれも夕占をよ

女三人向三辻問之とゝ

よめるふく知らるゝ

作る

櫛歯三度後

云々とあり

とゝふふ詮て

を問ふやゆふけの占ま

見せかむ、と見え、續後拾遺集に、物名、しもゝ崇徳院御

製、刺櫛もゝげの歯形くて吾妹子ゝゆふけの占ゝ問

ゝぞわゝらふ、とよ由せを

ひてゝゝげの小櫛の占ゝ

のむゝ形おれも夕占をよ

女三人向三辻問之とゝ

国立国会図書館　タイトル『正ト考 3巻』 請求記号 特1-404　ガラス使用

のせる例ありける哉。後ふト字を象りて。三辻といふ
ばき処を求出せる。さらしらわざにてあらざるら。辻
和名抄十字の注ふ今按十字者東西南北相分之道其
中央似十字也俗用辻字都无之本文未詳とい
俗ふ四辻とも以ふ古れなり八雲御抄占の條ふ
と記しをまゐるを辻占と云ふは四辻ふ出て手ふ
書ふ辻占をまゐるを辻占の由ふて此占形る
心に道祖神を念じて歌を唱ふ其歌を辻や辻四辻
内の一人の辻占まさしく吉凶を定むと記せり
ふ辻来る人の語を以て辻占を問ふ法何ふくも占はむとするをのあるとき
四辻へ占を問て百辻や四辻ゞうちの一の辻占まさしく
人れ辻の出て神ふの歌を三かへり唱へて待ほどに道行
の三占の神ふあ歌る人の言葉聞て思ひ合せて占ふ
人めふあ人の言をとる形りと物いを云へざれば
も形り但し人三人めふあるる人物云へり。それらは次
は辻古とのいふ人の言をとる形りと物いを云へざれば
古風ふ辻ふきるよりおいり形ふ推考るふ。此占必しも十字の衢

形らばとも。便よく人の往来する衢ふ出て。ト合せる
ふ形るばし。まゝ女三人とい辻るも。三辻ふ分き居て。
ト合きる験ち多れらふに従ひて。定むるわざあるば
けきば。おきふ准辻てれをへば。四辻ふては。四人分れ
居てトふる形るばし。されどトふる人の心々ふて。一
人ふてもありしふるばし。まさおの占は。女のする占
のおとくれこゆれど。女ふをかぎるばうらば。上ふ挙
きる萬葉集ち。夕占の歌ふ。家持卿のほらふ。男のよめ
ふも見えきり。後世ふた。此占哉。むらち形きすさびのお
とく思むありて。れのゞらら男の為るおとはをき城

さあらで。ゞ直情なる女のする行のおとくなりし
る後の世ゝさまにあはせて。然かけるものなるべし。
さて午歳女午日問之。と注せるは。心得ぬさしゝ。トふる
女の生年と。トふる日と。同し支を用ゐる由なれ。一ゝ
をもて示す意ゐて書るゐや。おはゝゝゞゞゐも。干支ゐ
ゝりてものするゐとは。古意ゐあらぬ。まゝ作堺散米
とは。ト問すべき衢の境を心に定置て。そゝ境内ゐ米
をうちまく由なり。此米ゝ散くは。邪神を攘ふ術ゐて
中昔の書どもゐ見えて。古よりのわざとおもへり。
今俗の女詞ゐ。米ゝうちまきとゝふも。おれより出ゝ

る言ゝり。儀式の大殿祭儀ゐ。御巫子等殿内ゐて散米
酒。とゝえゝるゐゐゐて。式に同祭の祝詞の屋船豊宇
気姫止。御名乎波奉称利氏。とゝゝるとゐろゝ注ゐ。俗
謂宇賀能美多麻。今世産屋以云々束稲置於戸邊。乃以
米散屋中之類也。と見えゝる。當時もゝら産屋ふてす
中昔の書ゐ見えゝるを。然るわざとゝりし趣なり。
ゐは妖物ゝ攘ふ時ゝゐとゐも見えゝれど。中
三度云々とは岐神を迎ふるわざゐ。まゝ鳴櫛歯
内ゐ来經る人ゝ。内人と定めて。そゝゞ言語を。神の答
ゐて告ゝまへる御言として。トふゝ由なり。但し月夜
尓波門尓出立。我家の門ゐ出て。夕占問足占乎曽為之。

ともよみきれど。かからば衢ゐ出て。ものするゐはあらで。家の門ゐまれ。いげくまま孤。所ゐしとがむて。往来の繁紀ところを求めて問ふわざれるばし。まと萬葉集十一巻に。玉桙路往占。占相妹逢我謂とよめるは。タトにはあらざれど。道城行かゞら。往来の人孔語をもて占へきるゐて。占問ふ事た。あきも同じかるばし。さくそ孔占合きる趣の。書ゐ見えきるは。萬葉集十三巻相聞作者未詳の長歌ゐ。紀の國孔濱よ寄るてふ。鰒珠。拾はむといむ。て。妹の山。勢孔山越えて。行し君。いい来はさむと。いい帰り来むとかも。玉桙の道ゐ出立。タト城。吾問むしらば。タト孔吾に告らく。吾妹子や。汝ゞ待君は沖い波。来依る白玉。邊い波の依する白珠。求むとぞ君ゞ来まさぬ。拾ふとぞ君は来まさぬ。久孔らば。いま七日ばかり。早からば。いま二日ばかり。いらむとぞ。君を聞し。勿恋そ吾妹。おは紀伊國ゐ行きる人の妻孔。夫を恋わむて。いい帰来むと。タト城問きゐに。道行人の語る言城。吾ゐ告る答として。合せきる孔。そは吾妹子やよりはじめて。その占合ゐ道行人の語をもて。やゞて歌詞ゐよみ結べるに。よくれおえきり。いとめげらしれよをざまゐく。めできくいきれゐる女歌孔。おの反歌ゐ。杖衝毛。

不衡毛吾者行ろ絵ども君が来はさむ道の知らるく
と由論ふ条上ふ来名戸之神を夕卜孔神とせる
の不衡毛去ふ条ろて問云萬葉集三巻形る杖を長歌ふ杖策毛る
ふ神の衡毛去ふ条ろて問云萬葉集三巻形る杖を長歌ふ杖策毛る
の。前をどさ杖ぢをふがむ道長知歌ふ急遠迎出べにくもとら夫孔帰言
路往占ふ。占孔貝ば妹ふ逢はむと。我ふ告りる。と
の。前をどさ杖ぢをふがむ道長知歌ふ急遠迎出べにくもとら夫孔帰言
路往占ふ。占孔貝ば妹ふ逢はむと。我ふ告りる。と
の。前をどさ杖ぢをふがむ道長知歌ふ急遠迎出べにくもとら夫孔帰言
路往占ふ。占孔貝ば妹ふ逢はむと。我ふ告りる。と
の。前をどさ杖ぢをふがむ道長知歌ふ急遠迎出べにくもとら夫孔帰言
路往占ふ。占孔貝ば妹ふ逢はむと。我ふ告りる。と
の。前をどさ杖ぢをふがむ道長知歌ふ急遠迎出べにくもとら夫孔帰言
路往占ふ。占孔貝ば妹ふ逢はむと。我ふ告りる。と
の。前をどさ杖ぢをふがむ道長知歌ふ急遠迎出べにくもとら夫孔帰言
路往占ふ。占孔貝ば妹ふ逢はむと。我ふ告りる。と
の。前をどさ杖ぢをふがむ道長知歌ふ急遠迎出べにくもとら夫孔帰言
路往占ふ。占孔貝ば妹ふ逢はむと。我ふ告りる。と

よめるを。上ふ論貝るおとく。夕卜ふはあらざれど。卜
問へる趣を同じ。まこと拾遺集ふ。恋。よみびと男の来むと
いひ侍りけるを。待らづらをて。ゆふけを問をせけ
に。人よ仰せて問はせ給るなり。よに来じといぶ侍貝今社ば。心ぼそ
く思ひて。よみ侍りける。来ぬ貝でを待ゐおしもの孔。
なろ〳〵ふをのむかふ孔おおのゆふけろ孔。清輔集
ふ。人をまつとて。来じといはぐ待ゐで寝べおにあら
ねども。思ひ貝ぬりてとあ夕占ろ孔。などよめるも見
え侍り。大鏡五孔巻。冷泉院の女御。三條院の御母超子
とこに。いろふれだ孔けるに。いと貝ぐわろうおはし

けるなり。二條の大路ふゐでゝ。ゆふけ問むゑまひけれむ。白髪いみゞくおろかなる女の。きゝ一人ゆくゞ。立とどまりて。なよわざしたまふ人ぞ。をしゆふけとひきまふゐ。何事ぞりとも。れがさむおとかおひて。おの大路よりも廣く長く榮えさせをゆへよ。とうち申かけておそまかりにけき。人ふをあらで。さるぼうものゝしめしたてまつりゝるにてそ。といふゆること見えゝり。但しおを例の占とは異ふて。神の道行人ふ託ゆて。おとさらふ告きゆひゑる趣ぞり。夫木抄ふ清慎公。ゆふけとふ道のほとりの人をもおとのいらへをせぬとやをぶく。おを道行人の答せざりたる趣ぞよ。よみなしきまへるぞり。

まゝ基後朝臣きむれふゝ問むしゝのふけぞ人ぞのめゝ正しからぬ由なり。と因ふる云。道ふ迷ゆる時ふ。紐もふ男をにおゝ云。六帖紐の題ゆゆ歌ふ。よ結びみをしゝ人ゆゆとのもゝあるのトうふ合やと。ちや。てまどふとも。妹ゞ結ぶ人ゆゆのどゆ紐ゆゆをし。奥るのせ山のざるきの趣ありとゝ。ごのべ

ゑるは。人げとおゆ野路山路ゆゆ兩端ゆゆのを解奥ろ山名のきるの趣ありとゝ。ごのべ

前ゆゑむ

○石占　夕占の下に擧たるおとく。萬葉集三巻長歌ふ。夕ユフケ
衢占問。石占以而。云々と見えたり。埃嚢抄文安二年。觀勝寺僧行譽
が記せりの道祖神支と云ふる條ふ。さへの神とて。小社ふ
まろれ石ぬ置くは。石神歟と云へる答ふ。道祖神なり。
故ふ路の旁に祝む奉ふ。此神ふ祈りて。事ぬ實否を問ふ
時。石にたゝて輕重ぬ定むふ。事の實否を問ふ時と
ふふ同し。石の輕重ふたけて吉凶ぬ問ふ時と云
る形り。ふは吉凶を卜合定むと云へ
て。いさゝか謙りを疑の辭ふがら。ちく形るを。人ふ對む
昔より後の俗語形り。中路ゆれ人を護ふ神ふり。道祖神
徳を。石は神ふ。ぬらば。問者の。さへ神の社ふ。まろ
ふ答て。石を神体ふは。ぬ石を置は石神ふと云ふる
あらばと云へる形り。石は路頭ふ便宜の物ふれば。置

始むる形ふ。石を路頭ふ云々を。答者の推案ふ。
ふり。實を故あるあとふ。日本
紀ふ。伊弉諾尊ぬ捨むま冥る杖の岐神は。道祖神形り
と云ふり。本書ふ。道祖神を。黄帝の子遠遊ぬ好ふ。路頭
杖ふ成ませる岐神を。混らはしく定ろねを。ふて死ける
もふひて。その記ざまの拙く。ぬ。ふを祝む由と。伊弉諾尊の御
を。今そぬ漢國の謾説をば除き。ふ。ふを無益ふ。ふを
さく。ろ畧ぬ修らひて。ふ。ふその説を擧む形り。形
わふかふそやれもはむ。北説石卜ふ據ありてぬふゆ。
人を。本書に就て見よ。
中昔の繪巻ふ。辻社むちゐるを。ものく内に。圓げなる石
を置むる狀を画ぬ。るふ。かふ。ぬふれ見えむる中に。福フク
富双紙といふものふは。朱の鳥居ふ神墻しめぐらし
むる社内ふ。例の石を画り。かくのおとし その左

国立国会図書館　タイトル『正卜考 3巻』 請求記号 特1-404
ガラス使用

右ふたま犬ゐり。その社の前ふ。翁跪(ヒザヲリ)て幣(ヌサ)捧(デ)をれり。
繪の旁(カタハラ)ゐる詞書は。朝風(アサカゼ)いみじう面(オモテ)ふしむゐ。璃
ぐ。さとや。老の身をてかくきへがきたゐ。れもひしのび
てまゐるは。あれとへいつで。さへの御神を
らむ。次ふゐれかしこ。さい拜。高(タカ)向(ムカ)の秀武と
申に。そふよりはじめて。ゐらゐて。ぐらを捧て奉らむ
ずるあとに。老のさいをひあれと恵みきべと。うしあ
みかしこゐ申事。かあらば。きゐ
るしあらしめきゐへと申(ス)とあり此は卜事せる由ふ
はゐらぎきど。道祖(サヘ)神の社内ふ。石を置る狀(サマ)ゐど。まさ
しゐ證とにべし。然きば埃嚢抄ふ。道祖神ゐ祈りて。石
の輕重にいけて卜問(ウラトヒ)きと。といへゐは。すれゐち石卜に
て。タトと同神ゐ因りてをのするを著(シル)く。まさ歌の趣(オモムキ)
ゐ。タトと同度(トキ)にトへきりとゐたこゆるゐ。所のさまを

ゐふもよくうちあひてゐたこゆるゐし。さはゐ可ど。そ
の石ゐにまて。輕重ゐいゐに定めて。占へきりゐむ。い
ぶぎ考へば。猿樂の狂言ふ石神(イシガミ)といふ云ふゐ石のあり出雲
寺の堂ゐ旁に。石神ゐ祈りて。卜問事のあるふ可(ヨ)否(アシ)ゐ在るゐ。
りて。その石を持(アゲ)て。卜問事のあるふ可(ヨ)否(アシ)ゐ在るゐ。
其石の輕く上り。ゐぎ重く上らざきど誓(ケカ)言(ゴト)ゐたきて。
の輕重ゐより。卜ふる趣ふ作れり。まされゐ態(ワザ)ゐ。
ら。その狂言作れる頃の。ゐらはしにして。古の石卜の
ゐおりゐる法ゐ。せめてれもむゐをせらるゐ。
ゐに。ゐ。夫木抄ふ行家卿。ゆふけとふ石卜をちてり。
あふゐとの。かをゐ恋とはれもひ知りふき。
まゐるは。まゐふ舉きる万葉集の。ダ衢占(ケト)問(イ)石(ウラ)以(モチ)而(テ)ゐ。
とよめる歌詞ゐよりきまへるゐ。
すへきふゐ。ゐらば。上ゐも論ゐふ。ゐふ。
ては。石卜ゐてタトを問ふこのゐ。
ゐ。もしタトとひと書きる本ゐごとくゐたゐ。
ゐ。ゐとばゐゐとゐゐゐ。

○足占　萬葉集巻十二ふ。月夜好(ツクヨミ)門(カド)尓(ニ)出立(イデタチ)足占(アシウラ)為(シテ)而(テ)往(ユク)

時禁八。妹二不相有。まゝ四巻月夜を波門を出立。夕占問。足占乎曽為之。行乎欲焉。上の歌ふをく似きり。同人のまゝ四巻夕占問。足卜乎曽為之。續古今集ふ。別。權中納言定頼行

ゆくべ問はまほしゝは一本聞わしきはまゝ何方ふ蹈定むらむゆしうらの山。細川玄旨法印。九州道の記ふ。かふ問はでふみ見るあしうらの山。おくへよしゆも郡ふ在。そのゝみ此ぬしの領れる所形りしとぞ。古の山冊後國熊野古の占合ざまも詳ならぬを。ゆしうら山の歌詞ふよりて推考るに。俗ふ童子形どのする趣ふて。まり歩行て蹈止るべき標を定めれおて。さて吉凶の辞をもて歩く足ふ合せりく踏ゝ。標の処ふて踏止りしる足ふ當りふる辞をもて。吉凶を定むるわざふもやゆらむ。さらばふ生をもちら道路ふどるて為べけ形ど。岐神ふ申してする形ふぼし。上ふ奉きるゞおとく萬葉集に。夕占と足占と両度せし趣ふれおゆる形も。れを乞合にべし。但しその萬葉集ふ足占と書るは。歌詞の調ふよりて。アウラとよむべけ形ど。本語はアシウラ形ア。

○橋占　寶治百首ふ。前内大臣ふぐさめて占問ふ橋ふ海さしか生。の形ふ中絶待をわきらむ。夫木抄ふ。家長れもむらね占問ふ橋ふ海さしか生。世のむとふ生を者

国立国会図書館　タイトル『正ト考 3巻』　請求記号 特1-404
ガラス使用

ゐみ給へらむ。源平盛衰記十二巻中宮御産の事の條治承二年のふ。十一月十二日寅の時より。中宮御産の氣れはしましと（ノシ）旬りけ給。云々。二位殿心苦しく思ひ給ひて。一條戾橋（モドリバシ）ふて。橋より東のゆめふ車ゝ給てさせるまゐむて。橋占をぞ問ひ給まふ。十四五歳の禿（カブロ）ゐる童べの十二人。西より東へ向むてはしりけるが。手ゝ給ひ同音ふ。榻（シナ）は何榻。國王の榻。八重ゝ汐路の波ゝよせ榻。と四五返うゐひて。橋をゝりて。東ゝさして飛がゐとくして失ふけり。二位殿歸り給ひて。せうと平大納言時忠ゝ卿に。かくと仰られけ給。波のよせ榻ふそは心得

候ゝねども。國王の榻と侍給ば。皇子ふてれゝしまし候べし。めで給ゝ御占ふふそ候へとぞゐゝせける。八歳ふて壇の浦ゝ海ふ沈み給ひてこそ。八重の汐路の波ゝよせゝぐゝも。思ひ知られ給まひけれ。と記して此文ふゆゝけて云。一條戾橋といふは。昔阿倍の晴明が。天文の淵源をゝゝめて。十二神將を使ひケるが。其妻職（シキジム）神ゝ顔ふ恐給ければ。かの十二神將を。橋の下ふ咒ゝ置て。用ゐの時を召使ひけり。是ふて吉凶ゝ橋占ゝ給ゝ問へば。必鐵神人ゝ口ふうゝて善悪ゝ示すと申ゝ。給ゝ十二人の童べとは。十二神將の化現

国立国会図書館　タイトル『正ト考 3巻』　請求記号 特1-404
ガラス使用

なるばしといふ所り。晴明が鐵神といふものを使ひ。又妖術を行ふことをなゆるを。中昔の書どもに見えきれば。然るおとも世しなるばし。されど橋占を。晴明が所為によりて。戻橋をみて為るにならば。橋を人の往来繁き処にまば。衢にて夕ト筮問ふと。同じ心おらひよりて。ものせるト事なるべし。そもく威衰記は。實録ながら。中に造説(ツクリコト)を交へて。はえなるばくかなをせるものにして。實事(マコト)虚説(フラゴト)選びとるばなを書れむ。おの橋占なく者りなどは。當時(フノカミ)の風俗(テブリ)なまく、に云ふる孟浪説(アトナレゴト)に。潤飾(カザリ)を加へて書きる文とをおえ

どそのかみの橋占大鏡集下に。寄橋恋。おひをてふゆふけの神よまさ。橋占とは。むり里わ〳〵りして。此集誰人なれ詳(カ)らき。集ふる別のさま。なれ知る。ふらば。三鏡なれ中の。大鏡とも。ありの。証とはをばなるなり。さてその童なれ諷詞(ウタヒコトバ)ををて卜合ふりといふる意なれ推考ゆるに。まづ榻(シヂ)を。車なれ榻なる。男児の陰をしゞとふふ合せるなるばし。類聚名義抄に。朕。赤子陰。しゝ。ル。まく玉篇ふも同義ふ注せるを。古訓よしゞ。今物語ふ。少輔入道寂蓮とをえし歌よみ。ゆりまの社ふまうで。社の前なるものをみて。此山のおもいらめしくをゆるろなる神の廣前ぞおを。いとよりそる。いと興あり。てそれおえけをぞん。なるなるとよさまふてぞ聞ゆる。まく新撰狂歌集下巻ふ。又ゆる時。女院の御所。御庭のまへとて。此人の地をとりて。御庭の内へをひろげを乃屋ば。女院のおまへなれむろく。なるおとは。なやう月ぞう

私地（シヂ）の入（ゆ）を。と見（ゆ）。とあるなり。今も男児の陰茎（ほゝ）を脛（シネ）を兼（カネ）ねるなり。榻（しぢ）は何榻國王なり榻といふるを。いま誕（ウム）れをまはむ御児（ミコ）。男皇子（ヲトコミコ）に坐して。をれをち御位（ミクラヰ）即（ツキ）たまふぢむよりに合せて。時忠卿のめでされ御占ふ候ふとはれを下へる形（カタ）り。但し。ぢ。とし。ぢ。と正音（タシキコエ）を違（タガ）ふ。そのかみ語格（コトバヅカヒ）の混（ミダ）れる世といひ。下を。しどけかむ。ト事れ判断（サダメゴト）言ふ。難（よが）むべれふのらば。さて八重の汝路れ云々の合せざまは。本書に見えるを。

○水占　万葉集十二巻。大伴家持卿。厚至郡渡（フクシニワタル）饒石河（ニギレイシカハ）之時作歌。おを越中守（こシ）て。在國の時

れ歌ふ。伊毛（イモ）尓（ニ）安波（アハ）受（ズ）。比左（ヒサ）思（シ）久（ク）奈（ナ）里（リ）奴（ヌ）。尓（ニ）藝（ギ）之（シ）河（ガハ）波（ハ）伎（キ）欲（ヨ）吉（キ）瀬（せ）其（ゴ）登（ト）尓（ニ）。美（ミ）奈（ナ）宇（ウ）良（ラ）波（ハ）倍（ヘ）底（テ）奈（ナ）。と見えをる美奈宇良は。水占なるぢし。然（さ）ども他（ホカ）ふ證考（カムカ）ゑるおとれし。波倍（ハヘ）底奈（テナ）は。おひて按（カムカ）ゑるに。延（ハヘ）てむふて。清れ河瀬の水中ふ。縄（ナハ）を延（ハヘ）ゑ。さ置て。それ流（さ）ゑ。くりゑるを。れ。或を其物の數れどふ。ト事（ワザ）ふをのらざるろ。釣（ツリ）するふ長き縄（ナハ）ふ鈎（ツリ）をいくつもはけて。河中ふ延（ハヘ）てをのする。はへ縄（ナハ）といふ牙（キバ）。然（サ）る語格（コトバヅカヒ）のゆるべ。結句（ツヾ）を一説に。水之（ミナ）占（ウラ）相（ウラ）を延（ハヘ）ゑ。水占延（ハヘ）てれを。水（ミ）くもれは（さ）び。水（ミ）占延（ハヘ）てれを。て郷（クニ）なる愛婦（ヲンナ）の。恙（ツヾ）れくゑ。ありやかしやを。問はむとなるぢし。おをせめて。いあれり

○灰占　正治二年百首ふ。小侍従手ぞそひふ問ふ灰占（ハヒウラ）

国立国会図書館　タイトル『正ト考 3巻』　請求記号 特1-404
ガラス使用

ゐて明るアで。埋めど消ぬれをひなりケり。按察使大納言長方卿集ふ。寄占恋。れをひわむををびみもする灰占も。あふてゆあとはうをしーかりけり

○帯占　袖中抄常陸帯ゐ條。奥義抄云。常陸ゐ國ゐを。男女の中らむを。占ゐをむとては。苧といふものを。帯ゐしてひとつゐはけさうする男の名ゐ書ゐ。ひとつゐにを我名ゐかよて。彼神の御前ゐて彼神とを。鹿嶋の神を。いまする形り。その由は。下ゐ祝詞を申て。帯ゐ折かまして名をむかくして。末を祢宜ゐ結ばするなり。それよわろうるべゐ形からひにを。はゐををゞゐ結むをを。ようるばよはかけ

帯ゐやうに。アろゐ結びつなゞるゝ。ゐ。さもとれもふ男ゐをば。やゞてかけ帯のやうゐうちゃけつ。山菅占（ヤマスゲウラ）ゐの占のこゐ形どのやうゐ形るゐおとゝいぞ。ある人を申侍ゐ。次ゐいゐ文ゐ引つゞけて。さて無名抄の義ゐ。ゐゞゐ或人は申さをしと記せり。さて件の文ゐ中ゐ。彼神の御前ゐてゝいるゐ。無名抄ゐ。鹿嶋明神と申社の祭ゐ日云々。といふゐをうけて云へる言形ゐ。無名抄ゐ。俊頼朝臣のゐり。俊頼口傳ともいゐり。信ノ難ゐり。ゐ説ゐを多くしるさをゝり。ゐの袖中抄ゐ。その無名抄の説ゐも載せ。まゝ童蒙抄。綺語抄形どをも引載せをゝ。浮ゝりげゐるゐをゝど。顕昭ゐ説をも信ゐがゝゐれむとゐ。ゐとゐ。形ぞもゐく別をそめゐ。歌ゐ。形しの世や。新續うらめゐ。ゐ。ゐ。

合せて。その末找かむおだふ結はするとりや。奥義抄
常陸帯ゑトの條ふ云々。山菅占おどゑやう形るおと
とぞ。おの上ふ舉て記せ本草和名ふ云。和名抄
也末須介。和名抄ふ。菅。唐韻云。菅。茅属。草也。音姦。字或作
簡。和名須介。と見えるおとく。也末須介とも別形
ど。万葉集おどふ。也末須介找。ぐ須介ともいむて。菅
字找用ひ。ぐり。万葉集十二巻。相聞。正述心緒。歌の中ふ。
あるは。神占の菅ふて。おの山菅占と同。し占ふて。そのの
菅の根のといひて序とせる形ふ。さて此やまに
げを。山菅と書て。ぐ。ス。ゲ。と書て。ぐ。ス。ゲ。
古のいねあり。さくすこおの歌ゑ。二句ゑ立神古。はや
くより訓ぐこゑ。おとくし。てあるを。今おの考ぐ。
古を占字の訛ふるべくれもひく。然ふみて。それふし

ぐひて結句找ワレコヒザラムとゑみて。おの占ふ
れもむあはせぐるなり。さをいぐど。あまりふしひぐ
やり

○苗占（ナヘウラ）　藻塩草占部ふ云。苗占ふ道ゑあ形れ。ふへゑ
都ゑくいへり。と見えゑり。ふ道ゑ。ふえぐこし。都と
かけるは誤寫とゑゆ。おの占。他書どもにいるぐ見及
ざ。ぐだ。考ふべきより形し。但し万葉集十四巻。上野国。歌ふ。可美都気努佐野田舟。
奈倍能武良奈倍尓許登波佐太米都伊麻波伊可尓世母。と見えゑる歌を。畧解ふ。一ニの句を。上り毛野の國
の佐野なり。其所の田形り。苗代を。所々ふ一むぐ。
作るをのあれど。群苗といひて。それをうらふひゑ云
むうけゑる形るぼし。占を言の通へむ。むらとも云ふ
べし。我恋の成むやと占どへだ。成まじきと占ふ定まと
り。ぬ。ゑ。ぐだ。今はいうふしてまし。歎く形り。世母
を將。為形り。といゑ。おの考ゑ。ぐらば。苗占ふるべ

○歌占（ウタウラ）　長秋記長承二年の下ふ。七月六日巳未晴云々。自リ女院被仰云。七月七日當庚申ニ時。於乞巧奠前不論男女。七人會同（シテ）各書（キ）二舊歌百首。都合為一卷。用歌占。如指（スガ）不違（ハイ）云（ヘリ）。早可書進者（ヘリ）。此事未聞。然而依仰奠之。於其前書女房二人大夫公尼也。花見天。男五人師任。師仲。舞人忠方。男近方。男當時。依来合也。事畢（テ）結調納置。後知□此事之人語云。件歌等都合作造帋一帖也。自其夜至（ルマテニ）明年七夕納（メ）置東面戸上。七夕取出（リテ）問占也。若其間為風為嵐之吹落者。不待（レテ）七夕開之。問事例事也。各百首中有同歌又無事

妨云々。とゝえ。平治物語ふ。鳥羽院法皇。熊野御參詣の條ふ。權現を勸請し奉らばやと思召て。まさしき巫やあると仰けさば。山中無双の巫女を召出ば。御不審の事ゆり。占申せと仰ありけさば。權現すでふれりさせきまへりと云ふるとゝろのおと城。鎌倉本に。巫心細きやう形る歌占少々仕りて。申けるおとゝを浅まし。けさと記し。京師本。杉原本ふた。巫よに心細げ形る聲ふて。手にむすぶ水ふやどれる月影の。ゆるゝ無きゝ形世ふもそむる。此歌を二三度詠し云々。半（ナカラヤ）井本には。巫。法皇よ向（ヒ）進らせて。歌占を出したり。手にむすぶ

水ふ宿る月影をあるゝなたの形世ふをありけり。
とゝりて。下文ふ。さて云々と申さゞへば。巫女取あへ
ず。夏をゝる扇と秋の白露と。いぢをゝさまに置まさ
るぢき。夏ゝ終秋の始とぞ仰られける。仰とを。神託と
ゝて。ゝる言
ゝとおまゝふ記せり。参考本ふ。ゝの御条詣の事哉。實
録どもに證(アカ)して。すべて妄説ゝりと論(イ)ずるは。然(サ)るゝ
とゝゝゞら。ゝの物語ゝるせる頃。はやくより世ふゝりゝ
来をる。歌占ゝさまを知る證とをぢぢ今をば。諸本の
文の異ある哉も取ありめて。引記せるゝり。まゝ古事
談ふ。恵心僧都。金峯山ふ正(サ)しゝ巫女ありと聞て。をぐ

一人令向給ひ。心中ゝ願うらおへとゝりけをば。
歌占ふ。十万億ゝ國へは。海山隔てゝ遠けをど。心の道
ゝふ直ければ。ゝとめて到るとゝそゝ。ゝれは今と
占ゝゝり今れば。涕泣して帰をまふと云々。十訓抄ふ
ゝり。まゝ安居院(アゴヰ)ゝ神道集ゝいゝ書ふ。和歌抄云。白河
院御時御両所市阿波ト云御子を召御□云事ハ何
様ナル事アラト銀壺ニ乳ヲ入テ。此ヲ亦物ニ入
蓋ヲナメ。帝ト右ト(ウ)ノ二人御心ニテ。亦人ニ不知(レジ)之サツ
此中ナル物ヲ占(ウラ)ト御子ノ前ニ差出レハ。度(レバ)計跟蹤
ル歌占ニシロカネノツボヲナラヘテ水ヲ入バフ
シテカタク見ルベクモナシ□出御涙ヲ流給テ
勇事哉ト思食サレタリケリ。□銀共ヲ賜ハリ
ケリ。とゝるせり。此書はすべゝ詞を記せるもの
のゝゞら。文和延文の頃作をる書あれゝど。そのゝみゝ
歌占のさまをうゝへ
ふれをひ合をべし
まゝ猿樂の歌占とゝふ謡詞ふ。

加様ゐゐふ者は。加賀國白山の麓ゐ住居する者ゐて
ゐ。又是ゐ渡りゐ人は。ゐげくとを形く其を頼む由仰
ら是ゐ間。頼れ申てゐ。おくにさてもいぼくとも知ら
ぬ男神子(ヲトコミコ)ゐ。小弓ゐ短冊をゐけ。歌占を引ゐげ。けしか
らば正(ヤサ)し如由を申ゐほどゐ今日羅出(カリイデ)。歌占ゐ引うば
やと存じゐ。云々。いむゆる何(イツ)処ともなく頼むとゐへ
なり○歌占する男神子(ヲトコミコ)るものゝ父を。歌占を問むといふ由
二見大夫度會家次と後ゐ名,出来る。伊勢國二見,浦人。神職
さらば歌占を引申しゐべし。ゐ名,割を○加賀人ゐいふ
ふをい可り。一番ゐ手に當らむずる短冊の歌を兼
○家次(ハムガ)ゐふ。ゐるゐて歌占を引くと
ゐべし。判じて參らせゐべし。みゐうら占問
ゐ。加賀人ゐ讀む北を黄ゐ南を青

く東白。西く是形ゐ形そ発ゐろの山。加様ゐゐ。家次ゐ云是
む父のをを御尋ゐ形。云々。佛道の意ゐて歌占の言葉
頼をしく思召れゐへ。幸菊丸ゐいゐ判の言。云々
はむ。云々。鶯のゐひこ形中の郭公。しやゐ父ゐ似てし
やゐ父ゐ似ぞ。家次ゐ云是を父形ゐあとを御尋ゐ形。云々。ゐ
是は合を占ゐてゐ。云々。と判して。幸菊丸の家次ゐ
ゐ子ゐるゐあとを知りて。連帰
形と云可り。ゐはむう形き樂詞(アクヒコトバ)なゐう。ゐ形作形る頃
形歌占の趣(サマ)を知るゐし。さて是は歌書きる短冊を弓
ゐ付て。ト者の引鳴してゐるほど。神降(カミオロシ)ゐ琴を弾(ヒ)くわ
し。さて謡詞を考るゐ。ト者の弦を鳴らゐを引とゐ。
まゝゝト問(ヒ)人のそれせさする形を。やゐて歌占を引く

国立国会図書館　タイトル『正ト考 3巻』 請求記号 特1-404
ガラス使用

といふ事り。新猿樂記に。巫女は寄弦（ヨセヅル）といふ。古との見えたるを。古れかるばし。ト問ふ人の手まさぐりに取あつかふる短冊の歌を讀擧げ。それ歌によりて。ト問ふ古と我判（コトワ）るわざなりと記あるも。近き頃記せる或書に。伊勢國度會郡二見郷三津（ミツ）村よ。かの謠詞に歌占ふはゆる度會家次ぐ齋（ハツコ）形りとて。家号を北村と云ふ者に家に。歌占の弓と云ふものを藏傳（モチツタ）へ来り。三尺ばかり形る丸木弓に。柄を赤絹に巻く纏（マト）て。上を絲にて巻ぬ。その弓に本末に。短冊一枚づゝ付て。本形るには。神心なねとてそれ歌占の。と書記。末には。むくもちらきのたゝり弓に形と書記

来り。古に本末の歌。歌占の家まさ弦には。短冊八枚づゝ次ぐ謠詞に中にもあり。けて。歌一首づゝ書きて。その歌。まれにくみ底形るかゝにむらむぬて。しらぬ翁にあふまくちする。おそ拾遺集の旋頭歌の見る時にてそ。年を經て花のかくみと云ふ詞を省き来る形り。形る水はちりうくる我や曇に空にあらむ。古今集末の露をとのしづくや世の中に。おくれさまぐに来めしなるらむ。新古今集に。名も所にふよりてかたりけり。形ふものあしは伊勢のをまを。おそ延文の頃宗祇ぐ輯め来る菟玖波集に見えたる連歌の本末を合せて。一首とし来るを形なり。鶯に形かむ。の中に形ふと。

世に記。おやぐ父に似てしやぐ父に似ず。万葉集九巻なる長歌に形。

国立国会図書館　タイトル『正ト考 3巻』　請求記号 特1-404
ガラス使用

初の五句をとりて作るなり。千早振よろづの神も此歌かの歌占ゐ謡詞ゐもあり。

聞しめせ。五十鈴ゐ川の清ゐ水れ。北は黄ゐ南は青くむらし白。ゐしく ゐ ゐ ゐ

を君とヒゞ口を寄せても寝まほしけれ。鼓もちらも打
きく。とよめり。おもそのあみの口寄のさま知
ら聖きゝ。古くおのをのくをれきこえるは。栄花物
語。後悔大将巻。万寿元年ゝ。内府教通公の北方
ゝ物怪ゝて甍をゝ下るゝ。神のま
おとそらごと聞ゝむとて。左近のめのとゝ
御口よせゝて云々。かうゝぎをば御車ゝ口の
方ゝ乗をきゝと見え。久寿二年。台記。八月廿七日の下
ゝ崩後寄巫口ゝおど見えきゝ。今の俗ゝ口よせ。まゝ
梓巫ともいふゞ。小弓ゝ鳴しゝてをゝすゝるゞありとぞ。
弓ゝ用ゝるおとの同しゝ趣ゝ。ゝるなど。歌占ゝるさまゝ
よく似てゝこゆるは。よしゝあゝ。おは因ゝ
にゝ
ゝ

○久慈

長門本平家物語得長寿院の導師を定めらるゝ條ゝ。公卿僉議ありて。一同ゝ申さ聖けゝるは。彼十三人ゝ僧きちゝ面々ゝ。くゞゝ取らせゝらゝ。ゝべゝ云々。くゞは如何様ゝ

ゝあるゝゝよ。一を導師と遊ゞさ聖て。十二ゝゝゞ白紙
ゝてゝべゝと申さる。法皇後白河天皇仰有けるは。白紙と
導師と十三ゝくゞゝゝとらすゝゝゞ。一定一人を取あ
きらむずらむ云々。されゞ今一ゝくゞゝ加ゝて。十四
ゝなゝゝゝ。十三ゝ白紙と。一ゝのくゞと。都合十四の
くゞゝゝ取らゝゝべゝと仰下さ聖ゝ。云々。御定ゝまらせ
て十四のくゞゝ出さゝきゝ。十三人ゝ僧徒。面々ゝ取
きゝゝふゝ。ゝゝ白紙ゝり。御導師ゝゝるべゝくゞ一ゝ
は殘ゝきゝと見えゝ。おをゝくゞゝ神事にをゝら
ゞ聖ど。をとよりくゞとゝふ占事のあるゝより

国立国会図書館　タイトル『正ト考 3巻』 請求記号 特1-404
ガラス使用

あるべしとぞ五代帝王物語仁治二年の條に。四條院の皇統を。北條泰時が計らむて定奉らむとせるところに。泰時運をでに極まりをり。此事を計らひ申さばして。京都の御沙汰ならば。散々の方にと出来ぬべし。計ひ申さむとせば。小量の身なるべき事なもあらば。進退をまりをりとて。三日三夜寢食を忘れて案じけるが。何とも所を土御門院の御末をおそれを心中ふれもひそをども。所詮神明の御計ひに任すべしとて。若宮社へ參て。孔子筮をとりけるに。土御門院の宮ととり奉れば。さ程ぞ愚意の所案相違ぬし

とれもむて云々と見え。まさにより前のをよりけて。後鳥羽院御位すべらむと思食けるころ。七日御精進ありて。毎夜石灰の壇にて。神宮の御拜ありて。土御門院と。光臺院の御室俗名長仁親王とて御座を。継躰ぬが奉ふてうれをしまるべきと。孔子筮をとらせ奉ひをりけ奉ば。土御門院なるぞしとをとらをたまむぬ。とをとをえをめおまをらの御事ふぬきて。ちらく考る。齊明紀に。四年十一月。有間皇子の逆事を記さ奉る下に。或本云。有馬皇子。與蘇我臣赤兄。塩屋連小戈守君大石。坂合部連薬。取短籍ト謀反事。とをえをる短籍。

ちまくじ打ちとくたちそえうり。古訓ふヒネリブミと
よめるは。短紙ふト問ふ人との吉凶ゝ知ふべき文字
をかきて。其をいくつも作り。捻をうの形ゝ置て。さて
神ふ祈り申して。その中ゝ一つを拈り。開ゝ見て。ゆゞ
て吉凶ゝ決むる法ゝりけむを。紀ふはその義を得て。
然を訓るまて。ちまをすれをちくじの占ゝるべし。續紀
ふ。天平二年正月辛丑。十六日踏歌の人々皇后宮ふて酒
食ゝ賜ふる因ふ。令一本まゝ日本紀畧は採を作り短籍書以仁
義礼智信五字隨其字而賜物得仁者絶也。義者絲也。礼
者綿也。智者布也。信者段常布也。とあるは。占事ゝくじ

ふ效ひて興ぜらまをるものなり。古今の世ふもするわざなり下
に論ふ。さてくじとゝふ名。古書ふも見えざまどそは
れのゝ方ら記すちとの無かりけるふて。ちまも古ゝ
ト法ゝるばし。いまゞ文字無ゝうし世よりあり書ら
むるは。方圓縱横など物ふ畫ゝけなどして。はらら
むをうけむを。ゆゝねく文字を用ふる世と形りては。
短紙ふ字ゝかゝて。するちとくせるなるばし。さてそ
ゝくじとゝ名義は。ゝまゞ考へば。もしくはト庭ふ
祭らるく。久慈真知神と申ゝ御名の久慈と同言ふて。
ト問ふ意の言ふハらぬら。ちをせめていあゝり。さて今

国立国会図書館　タイトル『正ト考 3巻』 請求記号 特1-404
ガラス使用

もくじといふは。上ゐ擧たる平家物語ゐ見えたると。
れかうと同じ趣ゐするはいねとく神道名目類聚抄
といふ書ゐ。御鬮を竹筒ゐ。一二三の文を記せる串。三
本ゐ入まして。吉凶を神ゐきぐに時。慎て曰。其事吉から
ば其何。其事凶ならば其何を賜はらむと請求て。吉凶
を定む。まと御祓鬮は。吉凶ゐを所願ゐ紙ゐ書て。是
ゐきくゐ入ゐろめて。慎て神ゐ祈り。祓ゐ小麻を以て。お
れを撫で。四手ゐ付ける紙を得て。事ゐ是ゐ定む。今諸
社ゐ此事ゐり。といふ可るゐおとく。れほうとちの趣ゐ
もものすめり。さて其くじゐ上ゐ擧ける五代帝王物語。

まと吾妻鏡。明月記ゐどゐも。孔子と借字ゐ書ける
れもへど。そのうみ漢字の鬮ゐ當てく書くゐとは無
かりしにや。そまより後ゐもの鬮と書り。さて此
字ゐ字書どもに考合するゐ。正くは鬮。俗ゐ鬮と書
く。門ゐ从て書くはまと俗ゐりなど云む。字義は鬪取
也。或ゐ拈鬮也ゐど見えまと門ゐ戰爭也ゐど見えて。
慥ゐくじに當る義はきゐえど。もしくは漢國ゐもく
じに似ける卜事のありて。人各卜の合ちむゐとを爭
むて。亀ゐ命せて。籍ゐ丈籤ゐまゐ拈る意ゐて。制丈
る義ゐあるゐよれるゐをあらざるゐ。漢學する人ゐ

尋問ふぢし。さてその闘ぢあとの書に見あらはるは。上ゐゐ爲る吾妻鏡。明月記などぢ後ゐた。正長元年の椿葉記ゐ。正月十八日内府薨じたまひぬ。勝定院と称号申に れをひよらびゐと浅まし。今は御子もなけをば。御相續ぢゐのぐと沙汰あり。管領畠山諸大名評定して。勝定院の御連枝の御中を。八幡ぢ寶前ゐて御闘を取けるゐ。青蓮院門主に勝定院舎弟御くじぢりて。將軍ゐなし奉りぬとそえ。まと此事戎南朝紀傳ゐ。將軍不例日を經てをのみすくれきゐより。御家督御譲あるぢきぢ評定まちくなり。或を連枝のうちぢ僧を。還俗して家を續しめ。或を鎌倉の持氏世を治めむ器量其人ゐ當をり。異見ゐゐ爲をを分ぐとぢたゐより。德を神慮ゐ任せむとて。畠山滿家。石清水ゐ詣でく御くじ戎取けるゐ。青蓮院義圓大僧正將軍同腹舎弟御闘ゐあらうをゐ。同十九日。義圓ゐねてのゐらましにより。青蓮院を出。三月十二日ゐ終に俗ゐ還り。左馬頭ゐ任じ。從五位下ゐ叙をを。とし三十五。義宣と号ぢ。勝定院は義持朝臣の御あと。義宣ぢ。のちに義教と改めらる まと永享十年。康冨記ゐ。八月十五日。中山相公被奈石清水ニ被取御闘。まと伊勢大神宮長享三年御祭日記ゐ。延徳二年十二月山田火災のあとによりて外

宮にて御くじ拔取りをさせまゐられば。くじおりざるゆえ。云々。同明應六年記神宮朽損のくぐりゆ假御殿をいとなみ作らむとて拔。くじ取りてさだむべしと議定ありて。御鬮を三本拔くに。時の一祢宜。神前ゆまゐりて鬮一本取りかたうて來て。開拔給ふとてころに。假御殿拔くりをさせまゐれとの御くじ形。など見えて。今も諸社の神前にてする占事なり。（ウラワザ）占わざはあらで。くじをもて事を定めさるるおとの。ものゆ見えさるは。西行の山家集ゆ歌の端書ゆ夜中のくじくばりて歌よみ。題を短籍ゆ書て。捻り置て。一座の人々に配りさるるよりて。上ゆ挙さる天平二年ゆ。令ニ採ニ短籍ニ。とあるに。われ。おなじ人の撰りて探題。まさ鬮（キリ）井韻ゆ世ゆ。ともすゆ。わざなり。詩作るもれるものすゆ。

のゆ。ら同じ趣なり。まさ吾妻鏡印本脫漏の巻。元仁二年三月廿一日の下ゆ。於ニ御所ニ取ニ孔子ニ。昨日小弓云々。以ニ孔子ニ致ニ経営ニ云々。明月記貞永二年正月廿一日の下ゆ。文暦三年十一月三日。興心房語給ニ実有左衛門尉聟通能経光殊請ニ孔子ニ賦ニ分ニ左右ニ。まさ吾妻鏡康元二年八月廿一日。大慈寺供養。曼荼羅供。大阿闍梨等。事有ニ評議ニ。云々。任ニ建長例ニ云々。人人等也。四人以ニ孔子ニ賦ニ可ニ被ニ定ト云々。など見えまさ世ゆ。花嘗三代記と称ニ牙子ニ。る。室町將軍家の應安ゆ頃より。北朝の永徳の頃ゆ某ゆ。とのゆ。孔子ゆ。とをしるをゆ。あまさ見えり。おを毎年正月評定始ゆ。記せるゆ。正月評定の言をゆ。記ゆ式あり。その時くじ拔とり當り人。評定ゆ。そ乃ゆ。発す例ゆ。その人ゆ名を挙て記をゆ。なり。さてゆ。くじ拔出す人を孔子役とゆ。其くゆ。なく孔子の字を借りて書り。上ゆ論ゆ。おとくゆ。みいまさ鬮字をむ用ひざりしゆ。但しくゆ。べるゆ。鬮子とゆ。の應安五年正月の條ゆ。ぐ一ゆ。とゆ。ゆ。とゆ。を。後ゆ書ざまゆ。ひゆ。ふと訛りをゆ。推知るゆ。べしゆ。なるゆ。ばゆ。引出る孔子ゆ。鬮の下ゆ。子字を書るをもて。さて。右ゆ。今の世ゆも。事ありて。

人と人と互に考べきことのある歟。誰為むと定めげ
き事なきなどのある時。亀卜(クビト)拙して定むるも。れかうと
同じ趣ふて。皆古の久慈(クジ)の占より轉(ウツ)きたるなり

○依(ヨ)瓶(ベ)水の占　奥義抄ふ云。神さびてよりべる事ある
雨水ぢ。水草ゐるゆで妹を見ぬかを。ゐきは神社ふ瓶(ヘ)
を置て。そきゐる水ぢ。無ぢ事ぢどれひきるものを。神
水とてゐれをぢむなり。紀(タバス)の社などふ今もあり。和泉
式部の歌ふも。神うけて君はあらかふ。誰うさはよる
べふきまる水といひけむ。まゝ源氏物語葵上の巻ぢ
歌に云。さもゐそをよるべぢ水ふ影きえめ。かけし葵
ぢ忘るぢしやは。ゐれらをもゐの瓶(ヘ)ぢ水をよめ歌なり

と見え。袖中抄ふもよりべぢ水と擧て。さもてそは云
云ぢ歌を出して。よりべの水とは。神社ふ瓶を置きる
ふ。きゆきゐ水ぢり。その瓶(ヘ)をよりべといふを。神ふは
よりといふゐとあり。託宣とを神の人ぢ口ふよりて
ぢゐの きゆふこ。ぢり。よりゐと巫(ミコ)を申ても。神のい
きてをぢれぢせらるゝ者ぢり。さきゞよりべぢ水と
いふも。ゐの瓶ぢ水ふ。神の立よりたゆふ歟。神水とて
飲いきゞ。有事無事(キ)ぢ慥ふ伺らはるゝ心ありまゝ物
いぢをよりまゝといふを同じ心なり。まゝ寄占と書
てようらとよあり。神ぢよりきまふ占よてそ云々。

故左京兆顕輔卿なり は。よりべの水とぞ侍りし云々。とも見えて。彼の論ずる説ども彼あるまゝきて考ふるに。よりべの水といふゞ本名ゐて。まことは體見(カタミ)彼水とをいむて。そ彼水ゐ影を臨(ウツ)して占問(ヒ)し。まこと神水(ジンズイ)とも云ひて。その水を飲て誓盟(チカヒ)をも為(セ)しおとくたこえをり。その考説を。別ゐ記せるものあり。ところせゑ是ぞおほはいちば

○三角柏(ミツノガシハノ)占　夫木抄ゐ鴨長明。そもそくぐみりの柏(カシハ)彼しゞゞり葉彼。長々し世をいをひ来ゐけり。左注ゐ伊勢記云。おの國ゐ三角の柏といふものあり。ゐ侍従ゞ歌ゐ。神風やみりの柏ゐ問ふおと彼。沈むゐうくは涙ありけり。とよめりおの歌。續古今集ゐ。初句をれもひあまり。として載せらるおと是ゐて占(ウラナ)ふおとあるゐや。年ぞろれぼりりあくれを ふおと彼。此をび人々に尋ぬ是ぞ。え聞れよぞぬよし彼の歌りふ。いゝ彼るおとゐあり。おの柏。輔親卿集ゐ。系圖云。大中臣輔親。伊勢祭主。長暦二年薨 御裳濯川の岸ゐ生る新千載集ゐ。御裳濯川と云ふ処ゐ。齋宮とぐまりをまひて。御祓しをまふに。女房を立隠れり見るゐ。三角柏といふ柏をれおせて。此は何とゐりふと云へりけ是ぞ。申しつゐをしける。祭主輔親。吾妹子ゞ御裳濯川の岸ゐ生る。君をみりの彼柏と知る。とよめ侍る是ば。そ彼ゐ已ぐぐりにあるゐとて尋れぞ。昔やありけむ。今の世ゐを志摩國の内ゐ。とぐの嶋

と云ふ処ふあり。木ゐう爲にかゝらのやうまて生ひ
をる枝。拾玉集ふ云。神宮中。礼典之間。為永例有長柏。謂之三角柏。件柏者。志摩國吉津嶋堺。土貢嶋内山中生木。上也。まさ神鳳抄ふ。志摩國答志郡土貢のかりてゐりれろす時。平ふ
伏て落をる枝ば取らば。竪さまふ落るばりを取
る。そゐ落やうまて。卜問ふ事のありとゝや云傳へを
ふ。おれは神宮四度の御祭ゐ時。かゝらば入物なり。御
前ゐ御遊はて〳〵。四ゐ御門の腋ふ。とぐらゐこと云ふ
れわみ已を設け。社のゝゝさおの三角柏を。各一葉ゝ
つ持てよをだ。そのうへふ此を已枝そ〳〵ぐ。おとさら
是を腰ふさゝて出るゐり。長柏ともゝゝ申ふや。寂阿法

師百首ゐ歌の中ふ思ふおとゝぐの御嶋ゐ長柏ゐう
くぞ頼むゐろれめぐみ枝。と云へり。のやうふきけど。
いまゞそゐすゞゝ枝ば見ぞ。おの日。或人のもとより
贈ゐり。柏のやうまて。廣さ三四寸。長さ三尺ばゝり。は
おとに常ゐ木草の葉ふを似ずと云々。と見えゝり。是を
長明のしるせる伊勢記といふ書の中ふ。三角柏の事
枝記して。みわそくぐの歌よみて書れけるを。抄ふれ
主とその歌を載せて。その本文をも捨ずして。左に注し置るをのなるおと。件ゐ文中の言まゝ知らをゝり
家隆卿の四季百首ふ。よゝゝ世をゐ長月ゐ占ふ逢
ふ。三角柏ふ神酒をそ〳〵ゝる。とよみをゝへるも。おの
説ふ合へり。いをゆる土貢嶋を。今は伊勢の度會郡ふ
属て。東宮村とゝふ。ゝまも六月。九月十二

月。大神宮ゐ三節祭ゐ柏を奉ゑり。長柏も絶ゑるゐや。尋常なるを奉ゑり。いましへも其処より奉ゑる柏ま。神酒ゑ〻ぎ〻り〻ゞ。今は異処よ然るゐ袖中抄に。り酒柏を奉るゐと〻〻ゐりぬ〻とぞ

輔親集ゐ歌ゑと端詞を擧て云。中納言俊忠卿ゐ家ゐて。恋十首の中ゐ。逢ふゐとを占ふと〻ゑる題を。俊頼詠云。神風やゐ〻の柏ゐこと〻〻ひく。ゑ〻を下そでに〻〻みてぞ見る。私云或人云。伊勢大神宮にゐ〻の柏をとりて。占ふゐとあり形ぐるゐふゐ〻を叶ふ。ゑ〻ぬもかゐはぬなり。ゐの故ゐ。逢ふゐと我占ふゐ立〻を逢ふべ今ゑむ。取て袖ゑ〻〻みて悦ぶゐりと〻ゑるはそゐ引出ゑる俊頼卿の歌。まゑ或人の説も。三角柏

ゐ故實(フルコト)ふを合(カナハ)ざる。疎ある考ゐあり。ゐのほうゐも。俊成卿の五社百首に。う之〻くも袖ゐ〻〻まむ思ふゐと。三角柏ゐ今日ぞ言(コト)問ふ。寶治百首ゐ。衣笠内大臣。神風やゐ〻の柏ゐうゐ沉み。問ふゐ〻ゑてをぬるく袖うゐ。など見ゑ〻り。そをゝ〻くゐゐ三角柏ゐ占は。大神宮三節祭ゐと記奉る柏葉我占へ取ゐ己ざるゑて形べく。ゐ占事ゑをあらざ之ば。ゐ〻ゐ載ゑべきにあらざるを。むゝ〻の歌人ゑ〻ゐ中ゐ。ゑ〻ぐの占事ゐゐとく。恋ゐ歌ゐよゐあはせら之ゑるむ。いうまぞや思ゑるゐゐむゐて。おとゝりゞてら書そへ〻

特1
404

假字本末　四冊　刻成

此書ハ今世ニ行ハるゝ假名といふものゝ記原よりもむら假名五十音図いろは歌ハ事ニ至るまで廣く弁へ論むゝ古く書ゝる平假名の字体片假名ハ吳伊どもをも目安く據集めて考證し旁らヲコト点のゝことに及ひゝ世人のいまゆる神代文字といふものゝ字体をも廣く集め朝鮮國の吏道諺文ハ事をも合せて世俗ハ謬傳を委く弁論せられゝるもなり

殘櫻記　二冊　刻成

此書ハ南朝の御裔ハ皇子達のなりゆきハ事をくさぐくのむゝもに考合せて俗説の誤を正し因ミニ安德天皇の御事ハも吳説のあるをも委く弁へ正されゝるもなり

正卜考　三冊　刻成

此書ハ神代のむゝし天津神達の鹿肩を灼て卜相のゝし太占ハ卜法の事を對馬卜部の送伴その他ハ家ハ送法ともを普く考へ斎肩骨卜甲兆体火積等の事まて詳ニ考へ記しゝ卜庭神の事波ミ迦木の考さそハ琴占夕占なと雜くの占事をさへ委く考記されゝるもなり

長等山風　六冊　追刻

此書ハ天智天皇の御子大友天皇ハ御事跡その御子孫ハ吉と又その氏寺三井寺の事ども日本紀その他ハ古書ともニ相證して委く考記し又そのかと白鳳朱雀なといふし逸年号乃事をも諸弁しゝ壬申年の乱ニ功あるし人ミの伝をも考記されゝるもなり

安政五年戊午秋新刻

江戸日本橋一町目	須原屋茂兵衛
同芝神明前	岡田屋嘉七
大坂心斎橋筋博労町角	河内屋茂兵衛
同心斎橋筋	河内屋萬助
京都寺町通三条上	大文字屋与三兵衛
同二条通堺町西入	林芳兵衛
同東洞院通二条上	田中屋治助
同堀川通二条下	越後屋治兵衛

發行

書肆

国立国会図書館　タイトル『正卜考 3巻』 請求記号 特1-404
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『正卜考 3巻』 請求記号 特1-404

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『正ト考 3巻』 請求記号 特1-404

ガラス使用